

教 仏 名 聞

第24号
(発行日)

2012年9月1日

発行所：真宗大谷派念佛寺

〒6638113 西宮市

甲子園口2丁目7-20

電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.e

onet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/~souan/

《 聞法会ご案内 》

○ 〈同朋の会〉

毎月22日 午後2時始

○ 〈念仏座談会〉

毎月2日と12日午後3時始

○ 〈聖典学習会〉

毎月6日午後7時始

○ 〈真宗入門講座〉

毎月18日午後6時30分始

* 8月は2日の念仏座談会と6日の聖典学習会以外は休み。

罪ありて世に生まる

こういう実感は
先年、スリランカ
に仏教を訪ねる旅
をしたときにも少
し感じました。

スリランカは仏

先日、聖人の書かれた『化身土巻』を読んでいると、そこに引用されている龍樹菩薩の著された『大智度論』の「無仏世の衆生を、仏、これを重罪としたまえり、見仏の善根を種えざる人なり」という一節が目にとまって、身にこたえるものがありました。聖人がこれを引用されたお心は容易にはうかがい知れませんが、しかし私は、この一節を読んだとき、自分の罪ゆえに現代の日本に生まれてきたのだと感じ、「ああそうか」と思ったのです。

「無仏の世」とは当に現代、ことに現代の日本です。悟れる賢者どころか仏の悟りを真剣に求める人が稀な社会が日本です。日本は末法も末法、まさに無仏の世ですが、それを今までは、現代の日本はまさに末法になってしまっていると、まだ末法のこの社会を自分の外から観ていたのです。

しかし、「無仏世の衆生を、仏、これを重罪としたまえり、見仏の善根を種えざる人なり」は、こういう日本に生まれたのは私の罪が重かったからとだと、『大智度論』では仰せられている。過去の世で、善き行いをなさなかつたから、その「重い罪」によって、現代のような無仏・無仏法の世界の日本に私は生まれてきたのだ、と知らされるのです。こういうとまた、「今の日本人は罪が深い」というような、自分を離れて一般化してしまいかねないのですが、仏法はともかくまず「私一人の上に受けとめられるべき教え」ですから、善根を積まなかつた重罪の人は私であり、その罪のゆえに無仏の世に生まれてきたのだと知らされるのです。

罪ゆえに現代の日本に生まれてきた。こういう見方を私はほとんどしてこなかったのですが、今は本当にそうだと感じています。

教を準国教にしている小さな国ですが、昔の修行僧たちが一生涯修行に励んで生活していた場所を二カ所ほど回りました。それは人里から少しはなれた丘陵地の岩穴でした。静かな自然の森林に囲まれ、世間的な誘惑はほとんど何も無い場所でした。「ああ、こういう場所で修行を続けると、修行は自ずから進むだろうなあ」と感銘したのでした。

無仏の世とはどんな世界でしょう。それは仏もいなければ、真剣に仏を求める人もほとんどいないような世界であり、逆に「楽を求めるばかり」の世の中のことでありましょう。

仏法が無いのとは対称的に、満ち満ちているのは、娯楽、享楽、道楽、快楽の縁ばかりです。説明をする必要も無いぐらいに明らかなことです。こういう楽を求めるなら周りにいっぱいありますが、真実(仏法)の縁はほとんど

《 秋季彼岸会 》

9月22日(土)

午後2時始まり

ありません。学校にも家庭にも都会にも農村にもなく、ただ娯楽ばかりは花ざかりです。

しかも凡夫の心は、同じ『大智度論』に「識は常に樂を求む、正要に入らず」とあります。識とは迷いの凡夫の心のことです。私たちが心をいいます。

凡夫は常に何を求めているかというところ(楽)を求めている。だからいつまでたっても「正要に入らない」のです。

「正要」とは悟りにむかう正しい道のことです。凡夫は楽ばかりを求めて真実の世界に入ろうとしない、と説かれているのです。

快適さを追っかけてばかりいる私たち、その楽を与える

縁で周りが充滿している社会が現代の日本。そんな中に生まれた者が真実に入ることが非常に難しいが、それはだれのせいでもなく、このような無仏・無仏法の今の世に凡夫の識心をもって生まれた私の重い罪のゆえであると、教えられるのです。

こういう自らの罪の重さは悲しいことですが、そんな重い罪を抱えている私たち。そのような無仏・無仏法の世にある衆生を悲しみ、憐れみ、どこまでも助けずにはおかないと、無仏・無仏法の重罪の私の処まで、私を求め、寄り添い、喚びかけたもう仏、それが南無阿彌陀仏の仏様。この阿彌陀様ならではもはや真実に入ることが不可能でありましょう。「無仏の世の衆生を捨てず」との願を建て、私たちに代わって修行して仏になる因を仕上げ、それを私たちに与えて下さる。それが今口に現れたもう南無阿彌陀仏。そこまでの親切あって、重罪の無仏の世の私にも救いの御手がさしのべられているのでした。(了)

正信偈に学ぶ問答

(四十五)

万善自力貶勤修

円満徳号勸専称

(書き下し) 万善の自力、勤修を貶す。円満の徳号、専称を勸む。

(現代語訳) さまざまな自力の善行はいくら修めても劣っているとして、ひとすじにあらゆる功德をそなえた名号を称えることを道綽様はお勧めになる。

*

N 「へ万善の自力、勤修を貶す」というのは」

D 「自分の行う様々な善根やもろもろの修行によってこの世において悟りを開いて仏になろうとする、そういう道を〈貶す〉いわゆるしりぞけおとしめられる、と道綽禪師は仰せ下さっているということですよ」

N 「なぜ自力の善行はこれをしりぞけられるのでしょうか」

D 「凡夫の行うさまざまな善

は、善ですから悪いものではありません。人間社会の中で生きるにはさまざまな善行は、それなりに価値のあるものですから、人間同士のあいだでは勧められるものです。

しかし凡夫の行う善行はその主体は自我です。どこまでも〈私が〉行う善いことです。

自我が主体の善は、世間に生きる上に於いては、それなりに価値のある行いでありましようが、浄土に往生する行すなわち仏になる行としては小善にすぎず、劣っているから、確実に浄土へ往生する行とはなりません。ですから、さまざま自分の行う善行を積んで浄土に生まれようとするとは不可能であるから、不可能を不可能と知って、そういう立場を速やかに離れよといわれるのです」

N 「それでへ円満の徳号、専称を勸む」で、専ら称名念佛をお勧めになるのですね。なぜ念佛をお勧めになるのですか」

か
D 「それはへ円満の徳号」だからといわれるのです」
N 「円満の徳号とは」
D 「円満の徳号というのは阿彌陀仏の功德が名号に全てもついているということですよ、ことに必ず浄土に往生せしめるという阿彌陀仏の約束の徳がこもっているからですよ」
N 「だからこの念佛をへ愚かな私のため」といただいて、専ら念佛を称える人は浄土に往生することができるのですね。なぜ往生できるのかそこをもう少し説明して下さい」
D 「この念佛に阿彌陀仏の功德が全部こもっていると云うことは、南無阿彌陀仏の名号は阿彌陀仏御自身の現れなのです。阿彌陀仏御自身が南無阿彌陀仏となって下さる、その念佛を私たちに与えて下さるから、私たちは浄土に往生することが出来るのです」
N 「凡夫の行う善は自我が主体になつているということですが、お念佛を称えるのも自我が主体になるのではありませんか」
D 「そうですね。へ我が名を称えるばかりで救う」とある

《真宗入門講座》 (お勤め練習と正信偈の学習)

毎月十八日 (午後六時半始)
担当 (副住職) 土井尚存

念佛往生の願を聞いて、念佛を申すようになるのですが、どうしても始めは自我が主体で称えます」
N 「なぜ自我が主体で称えてしまうのですか」
D 「私たちは自らの能力(知性や行い)に対する信頼で今まで生きてきましたから、へやればできるへ考えれば分かる」といった自己信頼の心で念佛往生の願を受け取ってしまします。すると、へ我が名を称えるばかりで助ける」とまで仰せ下さる阿彌陀仏の大悲のお心が分ならず、へ称えていけばいつかは助かる」というように、自分の称える念佛の功德を当てにして称えるのですね。それを自力の念佛と言います」

N 「その自我主体の念仏は否定されていくのですね」

D 「ええそうです。阿弥陀仏の大悲の思し召しを聞くことによつて自分の力の限界が知らされてきます。そこに、称えているお念仏は阿弥陀仏が私の所に来て（汝を引き受けて助ける）と喚んで下さるのであったと知らされるのです。すると、今まで称えていたお念仏は私が主体で称える念佛ではなくて、私にお聞かせ下さる阿弥陀様の声であり働きであり、その阿弥陀様が私を引き受けて下さる主であつたということが、ほのかなり知らされるのです」

N 「そうするお念仏の主体は自我ではなくて阿弥陀仏になるのですね」

D 「ええ、私が称える念仏ではなくて、私にお聞かせ下さる念仏になって、阿弥陀仏が主体で私の自我は客体となるのです」

N 「阿弥陀仏が私の主あるじになつて下さるといふことをもう少し説明して下さい」

D 「それはお念仏を聞くといふことになるのですがその場合、阿弥陀仏は私の外から喚んで下さるのみならず、内の

内から喚んで下さる。阿弥陀仏は私とぴつたりとくつついていて離れなくなるのです。阿弥陀仏に抱きとめられるから、浄土に連れて行つて下さることになるのです」

N 「阿弥陀様におさめとられるから浄土に至ることができるとは、お念仏を聞くことではないのですか」

D 「ええそうです。そこでお念仏は浄土に往生せしめて下さる大いなる行（はたらき）だから、これをお勧めになり、逆に人間が浄土往生のために為すような小さな善はこれを劣つた行として頼みにしてはならないとお示し下さるのです」（了）

信心夜話

『一蓮院談合録』より。

（太字の文が一蓮院秀存師の言葉です。カッコ内は私の所感）

*

ある時、信次郎殿をおよびなされし故、何かお話があるかと思つて参られしに、御言葉なければ信次郎

は念仏して居らる。師はなお一生懸命夜中まで競争して称えて居らる。暫しばらくくありて師いわく。
「今夜は水入らずで有り難かつたな」

（一蓮院師のお世話をしていた厚信の高野信次郎。信次郎を呼んだ一蓮院師は、何も話をされない。そこで信次郎はお念仏を称え続ける。一蓮院師も同じように夜中まで称え続ける。法然・親鸞聖人は専修念佛のお方であつたことは聖人のご影からも明らかである。両聖人も長い数珠をもつておられる。数珠とはたんに手を合わせるときだけの仏具ではなくて、もともと念仏を繰り返すための法具である。その数珠をつねにもつて居られたことが絵図からうかがえる。ということとは専修念仏の行者であられたのである。その専修の流れがここに生きていることがあらためて知らされる。現代では、念仏を専ら称えるということとは、ほとんど無くなつてしまつた。この点は親鸞聖人と現代の真宗門徒との大きな違いである。お念仏申すこと、お念仏を称え続けることが（阿

弥陀様と）水入らずになることである。阿弥陀仏と私との間に介在が入らない。あるお方の説教を聞いて阿弥陀仏にふれるというのは、まだ直接的ではない。称え出て下さる南無阿弥陀仏の声を聞いて、直に聞いていることであり、直接阿弥陀仏にふれていることである。念仏は阿弥陀仏の（今現在説法）であり、それをお念仏に聞いているのである。「助ける、助ける」の仰せを聞いているのである。「ここにいるぞ」のお声を聞いているのである。親の喚ぶ声を直接に聞いているのである。これが親子水入らずである。

お念仏が弥陀御自身の大悲の声であると知らされると、称え聞かずにはおれない。あの先生この先生と聞き回るのも悪くはないが、阿弥陀様の直説法が一番有難いではないか）

*

信次郎の仰せに、
「後生には一念と報謝とが

あるぞや。一念はとどのつまりを其のまま助けてやるとあるが、報謝の一段は、なるだけ嗜たしなみ、励まねばならぬぞ」

（仏恩報謝は積極的なせとのお勧めである。自分が助ける段は、阿弥陀仏に丸々助けていただくなくてはならない。信の一念は、阿弥陀仏の「そのままなりでまるまる助ける」の仰せを聞く一念に決定する。しかし、信の上の報謝は自分の方から、善はなるべくたしなみ、励めほげめのお勧めである。善が難しいなら、悪いことはできるだけ慎つつしむとすることが仏恩報謝にならうであろう。しかし、仏恩報謝の基本はだれでもどこでもいつでもできる称名念仏である。これが基本であつて、お念仏していることが報謝の行に自然になつているのである。お念仏していることは周りの人たちにお念仏を伝えることになつていつているのである。お念仏は如来大悲の結晶であるから、お念仏していることは他者に如来の慈悲心を与えていつていることになり、それが仏恩報謝の基本なのである）（了）

木村無相さんの法信4

(先月号からの続き)

「信心」については、信心はいらないのではない。眞実信心無くしては助かりませんから。

「自力の信心」はイラナイのですねえ。自力の信心、つまりわれわれ凡夫が意業をハタラカセテ、助かりたいために、「本願を信じる」というような信心はイラナイというのであります。凡夫が意業をハタラカセテ信ずるといふような、イワユル信心は、ホントウの信心ではなく、「自力の信心」は、ウラをかえせば、「疑い」にすぎないから、

信・不信ともイラナイ
というので、「眞実の他力廻向の信心はイラナイ」といふのではないのですが、このことが、ナカナカわからないようです。

『信巻』や『浄土文類聚鈔』で
凡夫には、法爾としてモトモト信心はない、信心はオコラナイ、オコセない、というの、凡夫の意業をかりたてておこすような信心は、眞実信心でないから、モトモト、眞実信心はなく、したがって眞実信心のオコリヨウはないから、凡夫には信心なし、信心はおこらないというのであつて、眞実信心がイラナイというのではない。これがナカナカわからないので「信心」とさえいったら、ナニモカモ、

イラナイと決めてしまふようになるのですねえ。

これま

た、マチガイですが、これらのことは、ソレコソ、眞実信心を他力廻向といただいて、はじめてうなづけることで、イワユル、信前にはわからないので、「自力の信心」と「他力の信心」との区別がつかぬからどつちもイラナイと思うのですが、それはソレで、よいともいえましよう。

信前も信後も「凡夫意業のオコス信心はイラナイ、ニセモノに決まっています」から。

『信巻』信樂釈のところ、
眞実の信樂無く、
法爾として信樂なし

といつていられることも『文類聚鈔』で
然るに具縛の群萌・穢濁の凡愚、清淨の信心無く、眞実の信心無し
又、

然るに流転の凡愚、輪廻の群生、信心起ること無し、真心おこること無し
とあるのも、その実は他力廻向の信心が獲得せられることによつて、その信心の智慧に、自心というものが照らされることによつて、
「信心無し」

ということが、「機の深信」ということが、「機の信心絶無」ということが、「機の上の信・不信ともに用なし」ということがハッキリ、思い知らされるのであるから、「他力廻向の信心獲得」しないで

は、凡夫は法爾として、信心絶無ということも、眞実信心は他力廻向であるということも、
念仏往生 信心正因
ということも、本人にはわからないのであります。

*

こうしたことは、「他力廻向の信心」が獲得せられてこそ、うなづけることであるので、他力廻向の信心が獲得せられないで、凡夫のアタマでいくら考えても、以上のことはわからないのですから、アトカラ、わかること、うなづけることを、はじめから、わかるうといくらしてもムリですから、「他力廻向」とか「眞実信心がただけてこそ、自分には信心絶無ということがわかる」など、いったことは、今考えなくてよいのだと思ふことです。

アトからわかることを、知識や教義としてはじめに、教え、オボエさすから、アトからわかることを、はじめから、わかるう、信じようにするようになるので、むつかしいことになるのです。

それで一番大事なことを一番端的に、簡明にいつて下さつてゐるのが『歎異抄』第二條の

親鸞におきてはただ念仏してミダに助けられまいらすべしとよき人の仰せをこゝむりて信ずるホカに別の子細なきなり
というお言葉と思ひます。

もう夕食前で書けなくなりました。夜はツカレテ、ハガキ一枚書けませんので。ナムアマミダブツ
ナムアマミダブツ

(六月十日「木」 ゴ四時半)

《住職雑感》

近代インド聖者ラーマ

ナマハルシ(一八七九—一九五〇)の伝記に十七才の時に眞理を覚醒した経験が出てゐる。それによると(叔父の家の二階の部屋に一人で座つていたときに、突然、物凄い死の恐怖が私に襲いかかつてきた。死の衝撃は私の心を内へと向かわせた。『今死がやつてきた。これはいつたい何を意味するのか?何が死んでゆくのか?この身体が死んでゆくのだ』。私は手足を伸ばして、死後硬直が始まつたかのように硬くなつて横たわり、本物の死体に見えるようになった。私は息を止め、どんな音も漏れないようにした。『これでこの身体はもうおしまいだ』と私は心の中で呟いた。『これから斎場へ運ばれ、焼かれて灰になつてしまふことだろう。だが身体が死んでしまえば私も死んでしまふのか?果たしてこの身体は私なのか?身体は明らかに無言で生起がないが、私は私の人格が十分に機能していることを感じてゐるし、それとは別に、内側から(私)という叫び声まで聞こえてくるのではないか!私とは身体を超越した魂のことなのだ。身体は死滅するが魂は、死によつて決して手を離れられることはないのだ。私とは、不滅の魂なのだ』と悟つたとある。彼は、死を疑似体験し「私は身体を超越した魂であり、身体は死滅するが私(眞の自己)は不滅である」と悟つたというのである。彼は後に宗教の古典を読み、過去の聖者達が言つてゐる眞理とぴったりと符合していることを知る。こうして彼は近代インドの最も優れた聖者の一人になつた。現代人の課題は「私は身体である」という枠組み(束縛)をいかに超えるかということであるが、マハルシは一つの答えを見出した。南無阿彌陀仏もまたその課題への答えである。